



昭和29年4月の洪水で米里一帯の低湿地は水浸しになった

### 逆川という名の由来と変遷

月寒川は西岡の国有林内（環境緑地保護地区）を源として、月寒・白石・北郷地区を流れ、米里地区で豊平川（右岸）に注ぐ一級河川である。支流にはラウネナイ川、望月寒川、米里幹線排水がある。

豊平川に合流する地点は、昔の地図を見て分かるように一面が低湿地である。札幌一帯に大雨が降ったり、雪解け水で豊平川が増水すると、水位の低い月寒川に逆流して、一帯が氾濫した。この逆流現象を見て、土地の人々は月寒川下流をいつしか「逆川」と呼ぶようになった。

治水対策として、次の新旧地図の比較で分かるようにJR鉄道橋付近の蛇行を直線にして、その下流に新水路を掘削して豊平川下流に流した。それまでは今の旧月寒川・逆川を流れて豊平川に合流していた。

### 逆川流域の変遷

札幌郡白石村大字白石村字米里の開拓の歴史は、明治23年に9戸の開拓者が移住したことに始まった。

白石村の北部に位置して、望月寒・月寒・厚別・三里・野津幌の諸川が豊平

川に注ぐ場所で、低湿地と泥炭層が大部分を占めている。水が豊かな地形的条件を利用して早くから水稻栽培が行われ、明治25年には水田約3反歩の耕作に成功した。「米里」の由来もここにある。明治27年には逆川に米里水門を設けて用水路からさらに各所に用水を供給した。明治45年の豊平・白石・上白石・平岸四箇村聯合用水路設計平面図には、水路総里程7里33町14間（約28<sup>キロ</sup>）と記されている。

岡田開墾は、明治26年に滋賀県からの移住者50戸に116町7反歩（約116<sup>ヘクタール</sup>）の土地を与え、生活必需品や農具など給し待遇したが、毎年の水害のため、ほとんど転居していった。大正の初めには徳島県出身者2戸が残るだけだった。

農場付近の交通は、豊平川堤防沿いの道だけで、春の雪解けや秋の大雨のときは豊平川と逆川の氾濫で人通りが絶えた。また、夏は人通り少なく、雑草が繁茂して、たまに人馬が通るだけだった。

明治33年には44町3反歩に石川・富山・福井・鳥取・香川・新潟県から17戸を呼び松田開墾として耕作した。大

# 増水した豊平川の水が 月寒川を逆流する「逆川」

さかさ  
がわ



正の初期 1 年の収穫は米145石、大小豆20石、麦類850石、ナタネ 50 石を収穫した。札幌区と豊平川沿いにあり、交通便がよかった、と『北海道農場調査』（大正2年）に収録されている。

以後、時代が進み、札幌の発展とともに純農村から都市化への道を進み、昭和40年から順次区画整理が施行されていった。

特に道央自動車道の札幌ジャンクション周辺は流路の拠点として整備された。ここを挟んで広がる交通の便性の高い地区、この地区を含む周辺一帯は、道内物資の集積する流通拠点形成している。

#### 逆川治水の歩み

逆川は月寒川の新水路の通水までは月寒川の本流だった。この流域も泥炭層が堆積し、その厚さ6mに及んでいる。このため地盤は軟弱である。昭和30年後半から流域の都市化と度重なる水害により、豊平川支川の改修工事が促進されていった。

月寒川は昭和40年、望月寒川を昭和41年に本格的改修に着手し、昭和41年築堤に着手した。急速に進む都市化に対応するため、堤防工事に進捗に合わせ、低水路（川の水量が少ないときに川幅を規制するために一段低く仕切られた部分）、樋門（川の合流部に造られた水門）を新設した。また、豊平川合流地点付近には、河床の安定を維持するため、昭和41年床



左の写真と同じく昭和29年4月の洪水。東米里は海のようになった

止工（川床・護岸などの浸食を防ぐため川床をコンクリートで固める工事）を月寒川・望月寒川に各1基施工した。

流域の大部分が平坦で低地帯のため、川の長さの割に樋門の数も多く、軟弱地盤のため維持管理に苦労している。

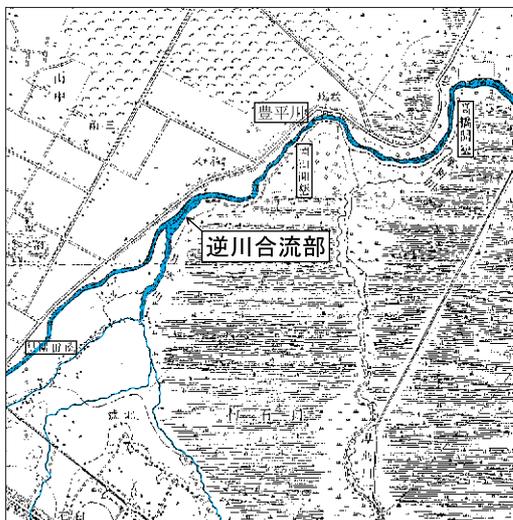
都市化の対応策として、昭和49年に望月寒川に「月寒川排水機場」の建設に着工し、51年に完成した。これは昭和56年8月の洪水では、内水氾濫の被害軽減に大きく寄与した。

明治初期から治水事業によって河川の整備率は年々向上しているが、洪水

時に水災害を最小限度に防止するための備えが大切である。逆川の河川敷にはコンクリートブロックなどの防水資材の備蓄基地が昭和59年に設置されている。

現在の逆川は蓋をかけられ、その上は芝生や道路の下になっている。豊平川合流点の米里水門付近にわずかに昔の雰囲気をとどめている。

（南部 享）



切り替え前の逆川（明治44年地形図）



切り替え後の逆川（平成4年地形図）